

劍(犬)のいる日々

中島 信子

本来の毛色は赤茶であった。中国では赤茶の犬は食用にするとか。まさかその事を知ってではあるまいが、公園を散歩中・酔はらいのおじさんに、

「うまさうな犬だなあ」

と、言われた事がある。綱をぐいぐいと引き二時間でも三時間でも大喜びで散歩していた時代である。

しかし、犬の老いがこんなに目に見えて進むものとは思わなかった。生後一年で成犬したあとは、年に四歳加齢する。ということはい、我が家の愛犬の劍は、現在人間の年齢にすれば七十六歳である。十五年間、我が家そのものを犬小舎にかえて、彼は生きてきた。柴犬とシェパードの雑種の中型犬で、寿命は十二

年というところを環境が良いせいか、家の中で飼っているせいとか、ともかく今もとりあえず元気で生きている。

『清貧の思想』で有名な中野孝次が飼った『ハラスのいた日々』は愛犬家の心情が実にリアルに描けており苦笑したり涙して読んだが、ハラスは花に埋まり土に帰った。が、我が家は、その運命の時が刻々とせまっている。もちろん『劍のいた日々』となろうその日のくる事を覚悟してはいるが、その日を思うと胸が締めつけられ涙がこみあげてくる。十五年間を飼ってきて、犬の純心さにふれてみると、人間の傲慢さがよくわかる。

不思議なもので、今やウシやウマやゾウや

カバまで劍に見えてくるのだから、中野孝次どころでないふり回され方である。

両手足の毛が白くなりだしたのは四、五年前だったろうか。歩き方がヨロヨロとたよりなくなってきたのは三年前、遊ぶという事を積極的にしなくなり、一日の大半を眠って過ごすようになったのはいつごろだったろう。耳も少し遠くなりだしていたのが、今夏、右耳の耳さきに水がたまり、一ヶ月通院したが完治せず、ピンと理的に立っていた耳が右耳だけ、くしゃんと垂れてしまった。

「かわった犬やなあ」

と思われる程けったいな顔になり、ついに耳は聞こえなくなったようだ。雷がなってもあれほど恐がっていたのが、もう何の反応もし

ない。目も白くにこり白内障になっている。もともと犬はすべてがモノトーンに見えるとか、その上きつとぼやけてぶれているのではないだろうか。多分かるうじて、働く鼻が耳と目の役目をしているようだ。

姿・形ででもこれだけ老いたのである。人間の老いのスピードにくらべれば大変な早さである。盲導犬などは神経を使うため、八年で別れがくるという。目に見えて、まさに目に見えて老いを見つめるのは悲しい。そしてなんと、最近は何回かはじまった。

夜、自分の寝床から出て、居間をぐるりと一周する。それが三回も四回もである。しかも後もどりができないため、せまい台所に入り込むと、誰かが見つけるまでそこで右往左往している。本当に人間と同じなのである。

老いてますます元気などとは言えない。頑固さにも超がつくような頑固さになり、一度気分を損ねると、ご機嫌をとつてもとに戻って頂くのに、丸一日はかかる。

「そんなもの犬畜生に機嫌などとするな」と言われそうだが、共に十五年も生活をしてくると、まったく家族であり、機嫌が悪く食事もしないでいるものが、ひとり（いや一匹）いると、どうにもおちつかないものなの

だ。そこで、好物をありつたけ並べて機嫌をとるのだが、頑として口を開かずむりに口に押し込めばポイントとはき出すのである。

この機嫌を損ねる一番の要因は、自分だけに留守番させて、私たちがいい所へ出かけたのではの想いからである。当然、寂しさを味わせないうちに、種々の策をねるのだが、「知ってらあ、おいしいもの食べてきたんだらう。知ってらあ、許さないぞお」という目をして横を向いている。これも人間と同じで、寂寥感はいと共増しているように、ともかく常にだれかを自分のそばに置いておこうとする。

特に剣の場合は娘が独立したあたりからの感情が一層強まり、「ねえ、ぼくの所に来ててよお」と、自分の寝床のへやにたえずピーッピーッと鳴いて人を呼ぶ。そう、ピーッ、ピーッとヒョドリにでもなったように鳴くのである。

人間のようにプライドがない分、直接的に感情を表現するので、笑ってしまうことも多々ある。ため息をつくことも多くなった。犬のため息をつくことをご存じだろうか。とくに娘が帰った後などは、深い深いため息をついているのだ。

「やれやれ、疲れるもんだよ若い娘の相手は、でも、寂しいな。なんたってあの娘はほくの妹なんだから」

両手を並べた上にあごをのせ、なんとも表現のしようのない目で、ふうつとため息をつく。実に人間的である。もともと喜怒哀楽のはげしい犬であることは分かっている。娘を送ったあとあの表情は絵になる。そこには孫を送った老人の寂しさがある。娘が小学校二年生から共に寝、共に歩いてきたのだ。剣がしゃべれたら何と言うだろう。

娘がおとしたまで買った剣。風にふきとばされそうに小さかった剣。日々成長し、いたずらざかりには電話線をくいちぎった剣。娘を馬鹿にして、娘にかみつこうとし、

「剣、お前より香の方が百倍も大切なのよ、どんなことがあっても香にかみついてはいけない、わかった」

と、さんざんたたかれ、その日以来娘が何をしようとして、じつと堪えるようになった剣。

たかが犬、されど犬。頭のとっぺんまで白くなり、そそを時にするようにもなった。私たちはこの剣にどれほど多くの時間と労力をさいてきたことか。それでも家族の一員である。一日でも長生きをと思ってしまふ。